

集率を測定して量の増減を施行した。TTO, PT-INR は両群で有意差なく, ADP, コラーゲン, リストセチンによる MAR も差を認めなかった。D-dimer, PIC-test, TM 等には両群で差を認めなかったが, 凝固Ⅶ因子活性は非投与例で有意に低値であった。抗血小板薬投与により凝固・線溶動態が如何に変化するかは未だ不明であり, 更なる検討を要すると思われた。

5) 全自動酵素免疫測定装置エルジア・F300を用いた TAT, PIC, Dダイマーの迅速定量

高桑 悦子・吉野 紀子
柴田 昭 (新潟大学第一内科)
高橋 芳右 (同 輸血部)

トロンビン-ATⅢ複合体 (TAT), プラスミン- α_2 PI 複合体 (PIC), Dダイマーなどの分子マーカーの迅速な定量は, DIC や血栓傾向の病態診断, 治療効果の判定, 早期診断などに役立てることができる。新しく開発された全自動免疫測定装置エルジア・F3000 (国際試薬) による TAT, PIC, Dダイマー測定法に関し, 従来法 (TAT テスト, PIC テスト, エルビアエースD-Dダイマー) と比較検討した。

TAT は96検体, PIC は95検体を測定し各々相関係数 $r=0.829$, $r=0.927$ と良好な相関を得た。回帰式の傾きも1に近く, 両者の測定値はほぼ一致していた。Dダイマーは171検体測定し, $r=0.784$ という相関を得た。Dダイマーの場合, 標準物質, 抗体の反応性の差などの問題もあり, 絶対値はエルジアの方が低値であった。測定時間は34~45分と, 従来より著しく短縮された。

TAT, PIC, Dダイマーは DIC の迅速診断および経過観察に有用と考えられ, 実際の臨床症例に役立てるには迅速な定量が必要である。エルジア法は十分その期待に応えるものと考えられた。

6) Ultra-early rebleeding in spontaneous subarachnoid hemorrhage

藤井 幸彦・佐々木 修 (桑名病院 脳神経外科)
竹内 茂和・皆河 崇志 (新潟大学)
小池 哲雄・田中 隆一 (脳神経外科)

To assess the incidence and risk factors of ultra-early rebleeding before early surgery in patients with spontaneous subarachnoid hemorrhage, we reviewed

170 patients admitted within 24 hours after the last attack of subarachnoid hemorrhage. Thirty (17.6%) of the 170 patients had ultra-early rebleeding. The incidence of rebleeding significantly decreased as the interval between the last attack and admission was extended. The incidence in patients with rebleeding before admission, in patients with intracerebral or intraventricular hematoma, and in patients with angiography performed within 6 hours of the last attack was significantly higher than in those without the respective factors. The incidence also significantly increased with the severity of neurological grade. There was no significant difference in systolic blood pressure on admission between patients with and without the rebleeding among each groups classified by time after the last attack. Ultra-early rebleeding had no significant association with the amount of subarachnoid clot and the site of aneurysm. Hemostatic examinations revealed a significantly greater reduction in platelet aggregability in patients with rebleeding than in those without rebleeding. The incidence significantly increased as the platelet aggregability was reduced. In conclusion, a high risk of ultra-early rebleeding was observed in such patients: 1) who were admitted within 6 hours of the last attack; 2) who had rebleeding before admission; 3) who showed poor neurological grades; 4) who had intracerebral or intraventricular hematoma; 5) who had angiography performed within 6 hours of the last attack; and 6) who had platelet hypoaggregability.

Key words: subarachnoid hemorrhage, rebleeding, platelet aggregation, blood coagulation

7) 解離性大動脈瘤を合併した chronic DIC の1例

井口清太郎・鷺塚 隆
帯刀 亘・柴田 昭 (新潟大学第一内科)
高橋 芳右 (同 輸血部)

症例は70歳の女性。'92年6月突然の胸背部痛で発症した解離性大動脈瘤。画像的に左鎖骨下動脈直下から両側鼠径動脈分岐部までの広範囲にわたり解離が認められ, DeBarkey III b 型と診断された。拡大傾向の著しい弓

部大動脈瘤に対して'94年4月人工血管置換術を施行されたが術後6ヶ月後、四肢の皮下出血、皮下血腫を主訴にDICを発症した。フィブリノーゲンの著明な減少、FDPとD-dimerの著しい解離から、線溶系の亢進が示唆された。ヘパリン、メシル酸ガベキサート等に治療抵抗性であったが、トラネキサム酸の持続点滴により、症状も改善が認められ、凝血学的にも著明な改善が認められた。解離性大動脈瘤に伴うDICに対して、しばしばトラネキサム酸が著効するという報告はある。線溶系亢進の機序として、血管内皮障害により、t-PAなど線溶系を活性化させる因子が大量に放出されることが考えられる。

II. 特別講演

「脳梗塞における凝固線溶系と治療上の諸問題」

国立循環器病センター内科

山口 武典 先生

第6回新潟精神医学交流会

日時 平成7年2月11日(土・祝)

会場 長岡市立川綜合病院
南館4階講義室

I. 一般演題

1) 社会生活支援チームによる訪問指導の実施状況報告

田上 和・矢走 誠 (柏崎厚生病院 精神科)
松田ひろし
山田 治 (東京大学医学部 付属分院神経科)

【はじめに】近年、精神障害者(以下、障害者)の開放的処遇が叫ばれているが、現実には困難な場面も多く見受けられる。今後、障害者達が在宅で自立した生活を続けていく上での課題点を探り、解決の方法を考えねばならない。その一つの方法として、治療スタッフのチームによる障害者達の家庭訪問を行い、実際の生活での様々な困難に対するサポートをして行くという事が有用であると思われた。このため柏崎厚生病院社会生活支援チームを設立し、平成6年4月1日より通院の障害者に対し

訪問指導を開始した。

【訪問方法と件数】対象は当院通院中の障害者である。スタッフはナース4名、ソーシャルワーカー2名、医師2名であるが、専任スタッフはいない。対象地域は柏崎地区。訪問開始に際しては、主治医の指示のうえ、障害者本人および保護者の同意を得た。

実際の訪問方法としては、障害者宅を週に1回から月に1回程度、男女のスタッフ2名一組で30分程訪れ、最近の様子、そして生活の場の雰囲気などをつかもうとする。必要に応じ家庭生活の指導や、年金や福祉制度の利用相談などを行う。就労者には、午後5時以降の自宅訪問や、職場や作業所の訪問も適宜行っている。週1回、スタッフ会議にて、その週の訪問状況や問題点について討議し、翌週の訪問計画を立てている。

平成6年4月より平成7年1月までに関与した内訳は、診断別では精神分裂病6例、精神遅滞4例、アルコール症3例、躁うつ病2例、他1例の計16例である。住居状況別では、独居7例、家族と同居9例である。訪問開始状況別では、退院を期に開始した者が5名、外来通院者が11名(但し、過去入院歴のある者を含む。)である。訪問指導を開始した平成6年4月の1か月間では、訪問実人数4名、訪問延べ件数5件、であったが、その後件数は増し、平成6年12月の1か月間では、実人数16名、延べ件数36件であった。4月から12月までの9か月間の総計では、延べ件数184件となった。

【考察】平成4年度の新潟県の資料によれば、柏崎地区は県内でも精神障害者の人口比率、入院患者数に対する通院患者数の比率共に高率であり、多くの障害者が病院の外で生活を送っている。このような状況下での訪問指導により、地域の障害者達の実際の生活面での困難に対する援助を行えるとともに、通院中断の予防や、症状悪化の徴候があれば速やかに入院を含めた加療が受けられるようなサポートができると思われた。問題点としては、専任のスタッフがいなかったため、訪問できる件数の限界がある事、スタッフの拘束時間中の他部門への影響や不満、医療効率が収入に見合うか等が挙げられた。午後5時以降の訪問による病院やスタッフの負担も大きいと思われた。

2) 初期分裂病の1症例

小田 晶彦 (新潟大学 精神医学教室)

思春期危機として治療を受けていた16歳の男性で、当